

《JJN スペシャル》 「治る力」を引き出す—実践！臨床栄養

東口高志 編

＜書評者＞ 佐藤禮子（兵庫医療大副学長）

『「治る力」を引き出す 実践！臨床栄養』、まずこのタイトルである。裏表紙には、「治るための栄養」「生きるための栄養」の大文字が跳ねる。このタイトルは、編者である東口高志先生のイメージそのものであると、感じ入りわくわくして頁をめくった。

期待通りの内容が展開されていた。実は、あるセミナーで一緒に折に、人間の身体や心の仕組みと栄養問題に対する東口先生の洞察の深さに敬嘆し、感動を受けたからである。東口先生の軽妙な語り口による講演は、生きた学問を具体的現実的に伝授するもので、会場を大いに沸かせた。

私事であるが、看護教師になり思い立って大学で教育学を専攻し、教養科目の授業で目からウロコの落ちる体験を何度かした。生物学では「動物である人間が、生き物としての植物と大きく異なる点は、外界から栄養を取り入れなければ生存することができない」ということ、心理学では「生活体である人間は、基本的欲求（fundamental basic need）として栄養があり、栄養物質の欠乏により生じる空腹動因が備わっている」という知識である。看護教育では、専門基礎知識として多くを学んでいたはずであるが、それらが「人間の身体」というイメージの中にしっかり納まっていなかったということである。

患者と対峙する医療者は、病者が発する「身体の声」、そして「心

の声」を正確に聴取・把握しなければならない。以来、60兆個の細胞で成り立つ人間の身体、感情と情緒、基本的欲求（一次的欲求）と社会的欲求（二次的欲求）といったさまざまな側面から人間をとらえ、最終的に、身体-心理-社会的に統合された統一体である人間、ありようは個々別々である人間、そして生活を営む個人として考えるようになっている。

本書の特徴であり優れている点として、4つ挙げられる。

1つは、栄養の意味を、人間が生きられるための源として直結させ、その全体像が示されており、編者・執筆者らの人間への強い関心に裏打ちされた人間愛が根底を貫いている点である。

“本書を読まれるみなさんへ”には、比類なき人間性を感じた。そして“はじめに”を読んで、東口先生は早くから「患者その人に目を向け、心を向けていた」と実感したが、人間への関心、人間への愛があればこそその結実であろう。この精神は、全編を通して執筆者らにも共有されている。素晴らしい。だからこそ私たちは、この書を読む気がいっそう増すのである、と言いたい。

2つめは、人の生きる仕組みの源である栄養について、生命を存続させるために機能する栄養と、生命活動の質を向上させるために機能する栄養とに、大きく分けて構成されている点である。

“第1章 臨床栄養管理をする

まえに”は、人間の生存・生きる、すなわち、生命を維持し活動し続ける仕組みにおいて栄養の果たす役割・価値について、栄養素の摂り入れに始まり、消化、吸収、代謝のプロセスに沿って解説されている。人が生きるために必要となる身体と栄養についての全体像、専門家として患者を援助するために必要な知識、などが端的にまとめられ、実践的にわかりやすく解説され、利用しやすいよう工夫されている。必読の章である。

3つめは、栄養を医療専門職者のそれぞれの専門的視点に立って見据えさせ、専門性発揮の実を高めると同時に、多職種協働による専門連携の必要性を浮き彫りにしている点である。“第2章 「臨床栄養」とは、何をすることか？”では、自分の知識を整理し、必要と思う箇所にはタグを貼り、いつでも読み返すことができるように使える。“第3章 全科共通！ 栄養管理計画の7大ポイント”“第4章 臓器・疾患別栄養管理計画”、“第5章 安全・確実・安楽な臨床栄養管理の「実施」”。いずれの章も明確に焦点が絞られており活用しやすい。

4つめは、図が巧みに用いられ、実践レベルの知識が強調されている点である。視覚的に工夫されているだけでなく、随所に「NOTE」として用語解説が満載されている。

以上、本書は、昨今注目されているNSTに限らず、患者にかかわるすべての医療職者が有効利用して、患者の療養の質を高める可能性が秘められていると確信する。

●AB判 頁312 2010年
定価3,780円
(本体3,600円+税5%)
[ISBN978-4-260-01030-6]
医学書院刊